

西大寺五福通り筋の町並み及び歴史的建造物の特徴に関する研究

正会員	○東居優典* ¹	正会員	江面嗣人* ²	非会員	上西徹* ³
正会員	福島孝篤* ³	正会員	江平卓寛* ¹	非会員	佐田健* ⁴
非会員	福本雅美* ⁴	非会員	眞鍋大輝* ⁴		

歴史的建造物 歴史的町並み 正面意匠 町屋 間取り 小屋組

1. 研究の背景・目的

岡山県岡山市東区西大寺(以下西大寺)は県の南東に位置し、歴史的建造物群が残る町として知られ、特徴的な町並み景観を造り出している。平成9年11月に岡山市が西大寺まちなみ整備計画の調査^{注1)}を行っているが、歴史的建造物の詳しい調査や、地域の歴史、町並み景観の変遷等の調査は行われていない。

本研究では、研究対象地を歴史的建造物群が残っている西大寺五福通り筋とし、各建造物の詳細な建築史的な調査を行い、伝統的な町並みの景観をつくる正面意匠及び建物の間取りの変遷や、構造形式の変化等の発展に着目し、五福通り筋の町並み等、歴史的建造物の特徴を明らかにする事を目的とする。

2. 調査方法

研究対象地についてまず文献による歴史的調査を行い、次に調査物件について、実測調査を行い平面図及び断面図、復原図を作成した。また、物件の外観及び内観写真、文献資料、家主からの聞き取り調査により、個々の建築等について調査し、正面意匠、内部空間の発展に着目しながらそれぞれの歴史的変遷について考察を行った。それらの物件が建築された年代等により分類し、各類型の建物の間取りや構造の特徴、それらの変遷について考察を行い西大寺に残る歴史的建造物の特徴を明らかにする。

調査は2013年7月9日～2014年10月17日の期間で、五福通り筋に面する主屋49棟(表1)の実測調査を行った。なお各家屋の名称は個人情報守秘の見地から番号で呼ぶこととする。

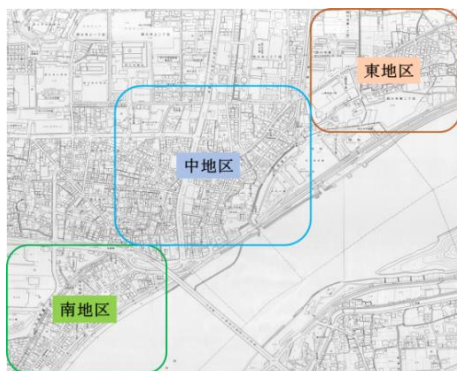


図1 調査範囲

3. 研究対象地について

研究対象地である西大寺五福通り筋は旧津山街道の一部で、太平洋戦争以前は多くの問屋が建ち並び、商業の為に主要道路として使用されていた。東側には吉井川が流れ、江戸時代には高瀬舟が作州や邑久から貿易の為に行き来していた^{注2)}。中でも西大寺五福通り(以下五福通り)は昭和5年から11年にかけて公共交通機関のバスを通すために道路拡幅が行われ、それに伴い五福通りに隣接する建物の軒切りが行われ、正面をモルタル等で覆った建造物が多く見られる地区である。

4. 建築年代について

実測調査を行った建物年代の推定の基準としたのは、小屋裏の棟札(図2)、和釘の有無(図3)、2階の階高(図4)、部材のススケ具合(図5)、聞き取り調査の内容等である。本研究において、調査を行った49棟のうち江戸時代の建物と推定されたのが15棟(内江戸後期9棟、江戸末期4棟)。明治時代が21棟(内明治前期7棟、明治中期6棟、明治後期8棟)。大正時代が11棟、昭和時代が1棟、情報不足による時代不明が1棟であった(表1)。



図2 棟札



図3 和釘



図4 1階に比べ2階の低い階高



図5 部材のススケ具合

5. 正面意匠の変化

5-1. 正面意匠の分類

以下には、正面意匠について分類を試みる。図6のよう

表1 実測調査の結果

調査番号	桁行	梁間	階数	用途	屋根の形式	屋根の入り口	小屋裏の形式	外観の形式	看板建築	表面仕上げ	庭の有無	庭の形式	敷地内水路の有無	建築年代			
No.1	7間半	3間半	2	洋服・仕立て	切妻	平入	トラス	正面切断型	×	×	無	×	無	大正時代			
No.2	4間	4間	2	駐在所	切妻	平入	束立て	正面軒型	×	×	無	×	無	江戸末期			
No.3	8間	6間	2	米	平入	入母屋	二重梁登り梁併用	正面軒型	×	×	有	中庭・裏庭	無	明治中期			
No.4	5間半	4間	3	建具	切妻	平入	トラス	正面軒型	×	×	有	裏庭	無	大正時代			
No.5	5間	4間	3	別荘	切妻	平入	×	正面軒型	×	×	有	×	無	大正時代			
No.6	4間	5間	2	米酒	切妻	平入	トラス	正面軒型	×	×	有	裏庭	川あり	大正元年			
No.7	5間半	5間	2	肥料 農業	切妻	平入	不明	正面軒型	×	×	有	中庭	不明	明治35から36年			
No.8	5間半	4間半	2	着物	切妻	平入	二重梁登り梁併用	正面軒型	×	×	有	中庭	無	明治中期			
No.9	3間半	7間	2	貴金属	切妻	平入	折衷梁	正面フラット型	2階のみ	木材	無	×	無	明治後期			
No.10	3間半	4間	2	豆・炭・米	切妻	平入	和小屋	正面切断型	×	×	有	中庭	無	明治後期			
No.11	3間	4間	2	住宅	切妻	平入	×	正面軒型	×	×	有	中庭	無	明治後期			
No.12	3間半	4間	2	宿	入母屋	平入	二重梁登り梁併用	正面切断型	×	×	有	中庭	無	大正時代			
No.13	7間半	5間半	2	醤油	切妻	平入	和小屋	正面軒型	×	×	有	中庭	無	大正末期			
No.14	7間	6間半	2	陶器ガラス	入母屋	妻入	登り梁	正面切断型	×	×	無	×	無	明治39年			
No.15	10間	6間	2	店(詳細は不明)	不明	不明	不明	正面全面	モルタル	有	中庭	×	無	不明 昭和初期に改築			
No.16	3間	7間	2	呉服	切妻	平入	登り梁	正面フラット型	1Fのみ	モルタル	有	中庭・裏庭	有(敷地内)	明治30年代			
No.17	3間	7間	2	乾物海産物	切妻	平入	登り梁	正面フラット型	×	モルタル	有	中庭	×	明治後期			
No.18	2間	6間	2	化粧品	切妻	平入	登り梁	正面切断型	×	×	無	×	無	明治初期			
No.19	5間	4間	2	米	入母屋	平入	登り梁	正面フラット型	×	モルタル	×	×	有(敷地側面)	明治初期			
No.20	6間	6間半	2	洋灯 ガラス 食器	入母屋	平入	登り梁	正面切断型	正面全面	×	有	中庭	有(敷地側面)	明治初期			
No.21	4間	4間半	2	乾物	切妻	平入	登り梁	正面切断型	×	×	有	中庭	×	明治前期			
No.22	4間	4間	2	不明	切妻	平入	登り梁	正面切断型	×	×	有	裏庭	無	江戸後期			
No.23	3間	4間	2	不明	切妻	平入	登り梁	正面切断型	×	×	有	裏庭	×	江戸後期			
No.24	5間半	3間	2	タンス家具	切妻	平入	水平梁	正面切断型	正面全面	モルタル	有	裏庭	有(敷地内)	明治初期			
No.25	3間半	4間	2	別荘	切妻	平入	不明	正面切断型	×	×	有	裏庭	有(敷地内)	大正期			
No.26	4間半	4間	2	タンス	不明	平入	登り梁	正面フラット型	正面全面	タイル	有	裏庭	有(敷地後ろ)	明治後期			
No.27	3間	4間	2	不明	切妻	平入	登り梁	正面切断型	×	×	有	中庭	×	明治初期から中期			
No.28	3間	4間	2	不明	切妻	平入	登り梁	正面フラット型	正面全面	モルタル	有	中庭	×	明治初期から中期			
No.29	6間半	6間半	2	不明	切妻	平入	水平梁登り梁併用	正面切断型	×	×	有	中庭・裏庭	有(敷地後ろ)	明治40年			
No.30	3間	5間	2	晝	切妻	平入	登り梁	正面フラット型	正面全面	モルタル	無	×	有(敷地内)	江戸後期			
No.31	6間半	3間	2	晝	切妻	平入	登り梁	正面切断型	×	×	有	中庭	×	明治後期			
No.32	3間	6間	2	足袋	切妻	平入	与次郎	正面フラット型	1Fのみ	タイル	有	中庭	×	無	明治後期		
No.33	3間半	5間	2	不明	切妻	平入	与次郎	正面切断型	正面全面	モルタル	有	中庭	有(敷地後ろ)	文政2年(江戸後期)			
No.34	2間半	4間	2	不明	切妻	平入	与次郎	正面切断型	×	×	有	中庭	×	大正6年			
No.35	7間半	5間半	2	米屋	切妻	平入	水平梁登り梁併用	正面フラット型	1Fのみ	タイル	有	中庭	×	無	昭和初期		
No.36	3間(2間)	6間(6間)	3	化粧品 雑貨	入母屋	妻入	トラス	正面切断型	×	×	有	裏庭	×	無	江戸後期/明治後期		
No.37	8間半	6間半	2	雑貨	切妻	平入	トラス	正面切断型	×	×	有	裏庭	×	無	明治29年		
No.38	9間	4間	2	石油 石炭	切妻	平入	水平梁登り梁併用	正面軒型	×	×	有	中庭	有(井戸)	×	無	明治中期	
No.39	8間	4間半	2	病院	切妻	平入	登り梁	正面軒型	×	×	有	中庭・裏庭	×	無	江戸後期		
No.40	6間	2間	3	住宅	切妻	平入	二重梁	正面切断型	×	×	有	裏庭	有(西川)	×	無	大正時代	
No.41	3間	3間半	1	住宅	切妻	平入	合梁	正面切断型	×	×	有	裏庭	×	有	無	江戸中期-江戸後期	
No.42	4間	4間	2	自転車	切妻	平入	和小屋	正面軒型	×	×	有	中庭	×	有	無	江戸後期	
No.43	4間	3間半	3	住宅	切妻	平入	登り梁	正面軒型	×	×	有	裏庭	有(西川)	×	有	無	江戸末期-明治初期
No.44	4間	5間半	2	焼場	切妻	平入	登り梁	正面軒型	×	×	有	中庭・裏庭	×	有	無	江戸後期	
No.45	4間	3間半	2	住宅	入母屋	平入	和小屋	正面軒型	×	×	有	裏庭	有(西川)	×	有	無	大正9年
No.46	5間	不明	2	宿	切妻	平入	×	正面軒型	×	×	有	中庭・裏庭	×	有	無	江戸末期	
No.47	4間	3間半	2	不明	切妻	平入	登り梁	正面軒型	×	×	有	裏庭	×	有	無	江戸後期	
No.48	12間	6間	2	酒	切妻	平入	登り梁	正面フラット型	正面全面	モルタル	有	中庭・裏庭	×	有	無	江戸中期-江戸後期	
No.49	3間	6間	2	宿	切妻	平入	×	正面軒型	×	×	有	裏庭	×	有	無	江戸末期	

に軒が残っている建物を「正面軒型」とした。五福通りには昭和5年から11年に軒切りが行われ図7のような形式が残り「正面切断型」とした。その後、正面をフラットに立ち上げる形式が造られ、これを「正面フラット型」とした^{注3)}。正面をフラットにするにあたり図8のような1階のみをフラットにする形式と図9のように2階上部までフラットにする形式、2階のみをフラットにする形式と、三つの形式が見られた。正面意匠は、調査を行った49棟中、正面軒型は19棟、正面切断型は18棟、正面フラット型は12棟であった(表1)。

正面フラット型は全てが正面軒型からの変更であることが建物の変遷を調査することで分かった。正面フラッ



図6 正面軒型(No.7)



図7 正面切断型(No.23)



図8 正面フラット型(No.16)



図9 正面フラット型(No.32)

ト型はモルタル造が多いが、新しいデザインの採用だけでなく、市街地建築物法の影響が考えられる^{注4)}。

5-2.出格子

出格子は江戸時代や明治初期の頃は付けられることが少なく、明治中期頃から、外部からの視線を気にするようになり、プライバシーの確保や、防犯の目的もあって、付けられるようになったと考えられる^{注5)}、調査によってそのことが確認された。

No.44は、つし二階の形式をとっており、小屋組に和釘が使われていること、また二階で見つかった祈禱札に慶応2年と書かれていることから、江戸時代後期と推定したものである。この建物の出格子(図10)には和釘が使用されておらず丸釘が使われていたことから(図11)、出格子は建築当初から付いていたものでなく、丸釘が使われたとされる、明治中期以降に後付されたものと考えられる。



図10 出格子(No.44)



図11 丸釘(No.44)

図8 正面フラット型(No.16) 図9 正面フラット型(No.32)

6.間取りの変化

6-1. 表土間の変化

西大寺において大正初期までは、表土間を設け(図 12)、店舗としている例が多い。昭和初期になると No.34 で見られたように表土間の面積が小さくなり、それ以降になると、店舗だった表土間を改装して、リビング等の居室として使う住宅も見られるようになる(図 13)。町屋の店舗として使用されていた空間が、店の機能を持たなくなり、住宅の発展に伴い居室として使用されるようになったためと考えられる。



図 12 表土間(No.6)



図 13 表土間を改造した居室(No.18)

6-2. 接客空間の変化

江戸時代においては武士住宅の中に接客空間が造られていたことはよく知られているが、町屋などの二階に客間が発達したのは、一般的に明治後期頃であるとされている。

西大寺において、調査した 49 棟の中で、座敷が 1 階よりも 2 階が広く、2 階に床の間や違い棚、書院を備えた整った座敷(図 14)を持つ建物が 13 棟あった。ほとんどが座敷に次の間を続ける続き間座敷の形式(図 15)をとり、床の間の形式は蹴込み床が多くみられ、明治 30 年代には 2 階に座敷が発達していたと考えられ、1 階を店舗及び私的空間として使用していたため、2 階に接客のための空間が発達したと考えられる。



図 14 床の間(No.33)



図 15 欄間(No.33)

6-3.廊下の発展

廊下は屋内の室を連絡する機能を持つものとして、大正後期から見られるようになり、大正末期には玄関から直接各室を連続する形式が見られる。昭和初期には玄関から客間までを廊下で連続する形式が見られ、町屋の特徴から、片廊下型の形式を持つ住宅が多い。

西大寺において、大正初期以前の住宅においては、通り土間を設けてそこから各室にアクセスできる形式をとっている。昭和初期になると通り土間に代わって廊下が

奥に通り、そこから全ての部屋及び階段にアクセスできる形式が現れる。

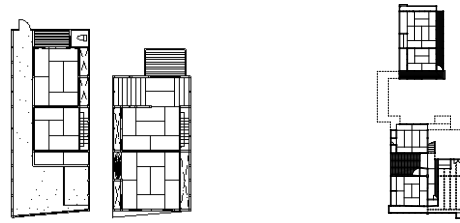


図 16 通り土間型(No.16) 図 17 全部屋アクセス型(No.15)

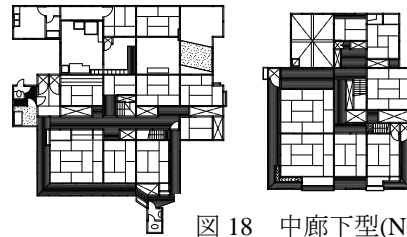


図 18 中廊下型(No.37)

7.小屋組構造の変遷と 2 階の規模の発達

一般的に、住宅は古くは平屋で、それがつし 2 階となり 2 階は物置や使用人の部屋等として使用されていた。そのため 2 階は天井高が低く、作業に梁が邪魔にならないように登り梁の形式をとっていた。2 階に居室を設け、水平梁の形式を用いるのは明治以降になってからである。2 階の発達に伴い、天井が高くなり小屋組が高く造られ、登り梁の必要が無くなり小屋組の構造が登り梁から水平梁に変化する(表 1)。

No.38 では小屋裏を物置にし(図 19)、天井高を低くしている。また、No.18 は改造された建物であるが、天井が低く張られ、室内に登り梁の一部が見られる。No.14 及び No.29 は、明治後期に建築されたと特定できた建物であるが、小屋組に登り梁の形式が見られる。

No.3 は明治時代と考えられるが、小屋組に登り梁と水平梁が併用されている。No.33 は大正 6 年に建てられた建物であるが、小屋組が水平梁となっている。これらのことから、明治後期から大正期にかけてが、小屋組構造の移行期であったと考えられ、2 階の空間が発展した時期と重なっているのが確認できる。また、No.4 と No.6 は共に大正期のものと考えられ、小屋組はトラス構造が使われ、この頃からトラス構造が使われるようになったと考えられる。



図 19 物置の小屋裏(No.38)



図 20 2階の居室(No.34)

8.地区ごとの特徴

8-1.東地区

東地区は調査物件が7棟で、そのうち棟札が発見されたのが1棟、建物正面に出格子があるものが1棟あった。建築年代では江戸時代と推定されるものが1棟、明治時代が2棟、大正時代が4棟と、様々な年代の建物があった。小屋組の形式では大正時代のものにトラス構造が使われているものがあった。外観の形式では正面軒型が6棟で正面切断型が1棟、正面フラット型の見られなかった。

8-2.中地区

中地区は調査物件が31棟で、棟札が発見されたのが4棟、建物正面に出格子があるものは無かった。建築年代では江戸時代と推定されるものが5棟、明治時代が19棟、大正時代が5棟で、他の地区に比べ明治時代と推定されるものが多く見られた。外観の形式では正面軒型が5棟で正面切断型が15棟、正面フラット型が11棟であった。これは昭和5年から11年に行われた道路拡幅のため、正面切断型、正面フラット型が他の地区に比べて多く建っていることが確認できた。

8-3.南地区

南地区は調査物件が11棟で、棟札が発見されたのが2棟、建物正面に出格子があるものが4棟あった。建築年代では江戸時代と推定されるものが9棟、明治時代は無く、大正時代が2棟で、他の地区に比べて江戸時代と推定されるものが多い事が分かった。外観の形式では正面軒型が8棟、正面切断型が2棟、正面フラット型が1棟あった。

9.まとめ

3章から8章で分析及び考察したように、以下の点が明らかになった。

正面意匠の変遷は、中地区の五福通りに関しては、元々は「正面軒型」という町屋の形式を持った建物が、昭和5年から11年にかけて行われた道路拡幅のために軒切りがされ「正面切断型」または「正面フラット型」に変化したことが分かった。中地区では看板建築の形式を持つものが多いのに対し、東地区や南地区は「正面軒型」が多く、道路幅員による軒切以前の建物正面が多く残っているのが明らかになった。また、軒切をしたとしても、看板建築の形式をとっていないものが多くある事が明らかになった。これは当時看板建築にするための財力が中地区に住んでいる人々にあり、他の地区と比べ豊かであったと考えられ、中地区が西大寺の町の中心として機能していたのだと考えられる。

出格子では、調査を行った49棟の内5棟に付いており、

いずれも正面軒型であった。5棟全ての出格子に丸釘が使われていることから、明治中期以降に付けられるようになったと考えられる。

間取りの変化については、1階に店を持つ町屋が明治30年以降に、2階に広く整った座敷の形式を持つ接客空間を造っていたことが明らかになった。表土間は、町屋の店舗として使用されていたが、昭和初期になると店の機能を持たなくなり面積を縮小し玄関などになり、また住宅の発展に伴い居室として使用されるようになったことが明らかになった。廊下は、大正期以前は部屋を介して移動していたが、大正期以後の片廊下などの廊下を介して全ての居室にアクセスできる形式に発展したことが分かった。

小屋組の構造の変化は、明治後期まで登り梁が使用され、それ以降の大正期には水平梁が使用されているのが分かった。この小屋組の変化と間取りの変化の関係からみても、明治後期から2階は倉庫や使用人の部屋といったものから居室に変化し、大正期にはほとんど居室として使用されていたことが分かった。小屋組みの構造の変化は、建物の2階を倉庫等から居室として使用するようになったことで、それに見合った天井高を確保するようになったため、登り梁から水平梁に変化する。これらの変化は1階を店舗とする町屋が多く存在した西大寺五福通り筋において顕著であり、1階には十分な広さの接客のための空間が確保できなかったため、広い接客空間を造るために2階が発達したと考えられる。

地区ごとの特徴は、建物の建築年代から考えて、南地区に江戸時代と推定されるものが多く、中地区は明治時代と考えられるものが多いことから、西大寺は元々、南地区が初めに貿易で栄えて、時代が進み徐々に中地区が明治時代に大きく発展したと考えられる。

注

- 1).西大寺町並み保存整備計画,岡山市,1997年11月
- 2).備前の国西大寺歴史探訪記,西大寺愛卿会,2013年6月
- 3).上西徹:西大寺五福通りを構成する歴史的建造物の変遷に関する研究,2013年
- 4).市街地建築物法が成立したのが大正8年で、昭和初期に庶民に浸透したと考えられる。
- 5).八日市護国 内子町伝統的建造物群保存地区見直し調査報告書,内子町,2010年3月

参考文献

- 1).江面嗣人:近代の東京における庶民住居の発展に関する研究(中央区・文京区における実測調査を中心として),1991年1月

*¹岡山理科大学大学院 大学院生

*²岡山理科大学工学部建築学科 教授・学術博士

*³夢和詩生伝統建築研究所

*⁴岡山理科大学 学生

Graduate Student, Graduate School of Okayama University of Science.

Prof., Department of Architecture, Faculty of Engineering, Okayama University of Science, Ph.D. Traditional architecture Institute, Yumeshi-sei.

Student, Okayama University of Science.